執筆者二〇二一年度業績欄（掲載順、三点以内）

○佐藤卓己（京都大学大学院教育学研究科教授）
・「日本メディア学の原点から―小野秀雄『新聞原論』」『メディア史研究』第五〇号（二〇二一年八月）
・『負け組のメディア史―天下無敵　野依秀市伝』（岩波現代文庫、二〇二一年）
・竹中亨・佐藤卓己・瀧井一博・植村和秀編、野田宣雄著『「歴史の黄昏」の彼方へ―危機の文明史観』（千倉書房、二〇二一年）

○福間良明（立命館大学産業社会学部教授）
・「青年学級、大学、そして司馬遼太郎ブーム―格差ゆえに教養が求められた時代」『中央公論』二〇二一年八月号
・「（解説）安田武と『語り難さ』へのこだわり」安田武『戦争体験』ちくま学芸文庫、二〇二一年
・「『戦中派』とその時代―断絶と継承の逆説」蘭信三・石原俊・一ノ瀬俊也・佐藤文香・西村明・野上元・福間良明編『シリーズ戦争と社会４　言説・表象の磁場』（岩波書店、二〇二二年二月）

○河崎吉紀（同志社大学教授）
・「学校歴から政治力への転換―大隈重信政権下の副参政官・関和知を例に」『評論・社会科学』第一三六号（二〇二一年）
・「閥族打破から国民教育へ―憲政会所属議員・関和知の不安」『評論・社会科学』第一三七号（二〇二一年）
・「憲政会幹事長の政治演説―原敬内閣期における関和知」『評論・社会科学』第一三九号（二〇二一年）

○石田あゆう（桃山学院大学教授）
・「戦後皇室と恋愛―天皇制「世論」と理想的結婚イメージとの関係性」『日本歴史』編集委員会編『恋する日本史』吉川弘文館、二〇二一年

・Ayu Ishida, "The Wartime Modern Girl In Japan: Changes in Female Images in Cosmetic Advertisements of Housewife's Friend (Shufu no Tomo) from the 1930s to the 1940s", in Wang, Sumei (Ed.), *The East Asian Modern Girl: Women, Media, and Colonial Modernity in the Interwar Years (Modern Asian Art and Visual Culture)*, Leiden: Brill, 2021.

・【口頭発表】「家政学部の制度化過程にみる戦後日本における「男女平等」イメージの展開」日本社会学会第九四回大会報告、二〇二一年

○井上義和（帝京大学共通教育センター教授）

・『特攻文学論』（創元社、二〇二一年）

・井上義和・牧野智和編『ファシリテーションとは何か—コミュニケーション幻想を超えて』（ナカニシヤ出版、二〇二一年）

・浅野大介（聞き手・構成：井上義和）「なぜ経産省は教育に乗り出したのか」、井上義和「解説　政策過程から読み取るべき官僚たちの動きと改革への意志」『中央公論』二〇二一年一二月号

○片山慶隆（関西外国語大学英語国際学部准教授）

・「言論人・正木ひろしの国際認識—戦中期を中心に」片山慶隆編『アジア・太平洋戦争と日本の対外危機—満洲事変から敗戦に至る政治・社会・メディア』（ミネルヴァ書房、二〇二一年）

・「第一次世界大戦と日本の平和主義—大日本平和協会の動向を中心に」『メディア史研究』第五〇号（二〇二一年）

・「『正木ひろし』を読む」『歴史評論』八六〇号（二〇二一年）

○山口仁（日本大学法学部准教授）

・「政治家・田川誠一を考察するための視点」『京都メディア史年報』第八号（二〇二二年）

・「ジャーナリズム研究におけるジャーナリスト調査の意義と方向性」『ジャーナリズム＆メディア』一七・一八合併号（二〇二二年）

・【口頭発表】ワークショップ「ジャーナリズムの未来を語る方法論としてのメディア史」（討論者）日本マス・コミュニケーション学会二〇二一年秋季研究発表会（二〇二一年一一月、オンライン）

○赤上裕幸（防衛大学校公共政策学科准教授）

・『分断のニッポン史―ありえたかもしれない敗戦後論』（中公新書ラクレ、二〇二一年）

・「三木武吉研究序説」『京都メディア史研究年報』第八号（二〇二二年）

・「新年に求められる希望のその先へ」『京都新聞』二〇二二年一月一日付

○長崎励朗（桃山学院大学社会学部准教授）

・「インターネットは音楽から何を奪ったか?」松井広志・岡本健編『ソーシャルメディア・スタディーズ』（北樹出版、二〇二一年）

・「大大阪のラジオ放送―文化と文明のはざまで」細川周平編『音と耳から考える歴史・身体・テクノロジー』（アルテスパブリッシング、二〇二一年）

・『偏愛的ポピュラー音楽の知識社会学―愉しい音楽の語り方』（創元社、二〇二一年）

○松永智子（東京経済大学　コミュニケーション学部准教授）

・【書評】「君たちはどう生きるか―佐藤卓己『メディア論の名著30』（ちくま新書、二〇二〇年）」『京都メディア史研究年報』第七号（二〇二一年）

・「メディア以前の事」『メディア史研究』第五一号（二〇二二年二月）

・「ディスカバー、ジャパニーズ―『二つの祖国』『山河燃ゆ』論争と〈日本人〉の境界」福間良明編『昭和五〇年代論』（みずき書林、二〇二二年三月刊行予定）

○白戸健一郎（筑波大学人文社会系助教）

・【書評】「スキャンダリズムとリスペクタビリティの間―奥武則『黒岩涙香―断じて利のために非ざるなり』」『京都メディア史研究年報』第七号（二〇二一年）

・「交叉する理想―昭和五〇年代の青年海外協力隊とメディア」福間良明編『昭和五〇年代論―「戦後の終わり」と「終わらない戦後」の交錯』（みずき書林、二〇二二年三月刊行予定）
・「中野正剛の修養と個性」『京都メディア史研究年報』第八号（二〇二二年）

○佐藤彰宣（流通科学大学人間社会学部講師）
・『〈趣味〉としての戦争―戦記雑誌『丸』の文化史』（創元社、二〇二一年）
・「「海外サッカー」のメディア体験―映像への渇望と食傷」『京都メディア史研究年報』第七号（二〇二一年）
・「ミリタリーカルチャーの出版史―戦記・戦史・兵器を扱うことの苦悩」福間良明ほか編『シリーズ戦争と社会4 言説・表象の磁場』（岩波書店、二〇二二年）

○松尾理也（大阪芸術大学短期大学部メディア・芸術学科教授、学科長）
・『大阪時事新報の研究―「関西ジャーナリズム」と福澤精神』（創元社、二〇二一年）
・【口頭発表】ワークショップ「ジャーナリズムの未来を語る方法論としてのメディア史」（問題提起者）日本マス・コミュニケーション学会二〇二一年秋季研究発表会（二〇二一年一一月、オンライン）
・「〔研究ノート〕情報化社会論と戦後政治」『京都メディア史研究年報』第八号（二〇二二年）

○戸松幸一（株式会社もくようしゃ代表）
・「古島一雄の尊敬する「政界の四先輩」―三浦梧楼・杉浦重剛・犬養毅・頭山満―」『京都メディア史研究年報』第八号（二〇二二年）
・「新聞「日本」のアジア観―古島一雄を中心に」（京都大学大学院入試提出論文、二〇二二年一月）

○比護遥（京都大学大学院教育学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員）
・【翻訳】トーマス・S・マラニー『チャイニーズ・タイプライター―漢字と技術の近代史』（中央公論新社、

二〇二一年）

・【翻訳】レオ・チン、倉橋耕平監訳『反日─東アジアにおける感情の政治』（人文書院、二〇二一年、第二章担当）

・【口頭発表】「焚書与読書─試論文革前後書籍的象徴意義」第十届中日学者中国当代史研究工作坊（二〇二一年一二月、オンライン）

○陶芷涵（京都大学大学院教育学研究科修士課程）

・『良友画報』における都市中間層の児童観─大人との関係性に着目して」（二〇二一年度京都大学大学院教育学研究科外国人入試提出論文）

・【口頭発表】"Middle Class's Views of Children in "The Young Companion": Focusing on the Relationship between Children and Adults" 京都大学大学院教育学研究科・北京師範大学教育学部二〇二一年度学術交流活動（二〇二一年十月）

○花田史彦（大阪商業大学・大手前大学・岡山大学・同志社大学・立命館大学非常勤講師）

・「民間学を継承する」『人文学報』第一一七号（二〇二一年五月）

・「観客・丸山眞男」大塚英志編『運動としての大衆文化─協働・ファン・文化工作』（水声社、二〇二一年）

・【口頭発表】「山崎正和 没後一年記念シンポジウム」（主催：「日本文明」研究フォーラム、パネラー：苅部直・宇野重規・花田史彦、コーディネーター：松井勇起、二〇二一年一〇月、オンライン）

○木下浩一（帝京大学文学部講師）

・『テレビから学んだ時代─商業教育局のクイズ・洋画・ニュースショー』（世界思想社、二〇二一年）

・「ジャーナリズム教育とジャーナリスト教育の課題」『京都メディア史研究年報』第七号（二〇二一年四月）

・「教育テレビ不要論にみる大衆の幻想と排除の論理」『現代思想』二〇二一年四月号

○趙相宇（立命館大学産業社会学部・国際調査教育セ

ンター特任助教）

・「日韓併合記念日」のメディア史―日本人本位の参加と「内鮮融和」の課題」『メディア史研究』第五〇号（二〇二一年）

・【口頭発表】「「始政記念日＝体育デー」のメディア・イベント―抵抗にもとづく動員への参加」東アジア近代史学会（二〇二一年七月、Ｚｏｏｍ）

・【翻訳】レオ・チン、倉橋耕平監訳、趙相宇ほか訳『反日―東アジアにおける感情の政治』（人文書院、二〇二一年）

○王令薇（京都大学大学院教育学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員）

・「オルタナティブな「中学生問題」の構築過程―ＮＨＫ『中学生日記』のストーリー分析を中心に」『マス・コミュニケーション研究』第九九号（二〇二一年）

・「名古屋市における地域放送局とコミュニティとの関係性―ＮＨＫ『中学生日記』の制作過程を例に」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第六八号（二〇二二年）

・【口頭発表】「「少年の主張」に映された「未来」の姿―青少年育成国民会議が主催する全国大会（一九七九―二〇〇八）に着目して」日本教育社会学会大会（二〇二一年九月、オンライン）

○温秋穎（京都大学大学院教育学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員）

・「明治时期史学者久米邦武（1839–1931）的文明观与中国观：从《米欧回览实记》到《支那大观与细观》」（明治期史学研究者久米邦武（1839–1931）の文明観と中国観：『米欧回覧実記』から『支那大観と細観』」北京大学大学院歴史学研究科「グローバル化と歴史研究の革新」院生シンポジウム）、優秀論文賞（二〇二一年一一月）

・【口頭発表】「戦前放送中国語「支那語講座」のメディア史―実用語学講座から対内広報のメディアへ」日本マス・コミュニケーション学会二〇二一年春季大会（二〇二一年六月）

・【口頭発表】Qiuying Wen, "Utilizing the Chinese

Language in Japan's Intelligence Activities 1897–1930s: A case study of MOFA officer Iwamura Shigemitsu," 16th International Conference of European Association for Japanese Studies, Panel Hisrtory29: China in Transwar Japan, Aug, 26th, 2021.

○松薗優大（京都大学大学院文学研究科修士課程）

・【書評】「具珉婀『都会喜劇と戦後民主主義―占領期の日本映画における和製ロマンチック・コメディ』」『二十世紀研究』第二二号（二〇二二年一月）

・【書評】「人びとは何故、特攻の物語に涙するのか　井上義和『特攻文学論』」『京都メディア史研究年報』第八号（二〇二二年）